

＜小学校 特別活動＞

楽しくうるおいのある学級をめざして

— 歌声、身体表現で深める人間関係づくりを通して —

糸満市立真壁小学校教諭 仲 村 克 美

目 次

I	テーマ設定の理由	51
II	研究仮説	51
III	研究の全体構想図	52
IV	研究内容	53
1	学級活動の特質と内容	53
(1)	学級活動の特質	53
(2)	学級活動の内容	53
2	学級内の望ましい人間関係とは	53
(1)	学級内の望ましい人間関係の条件	53
(2)	本学級の人間関係の分析 — 各種検査結果より —	53
V	実践活動	55
1	学級の組織づくりと話し合い活動の工夫	55
(1)	学級の組織図	55
(2)	話し合い活動までの流れ	55
2	歌声活動、身体表現活動への取り組みせ方	56
(1)	学級の雰囲気づくりにふさわしい歌と身体表現	56
(2)	レク係の輪番制	56
(3)	身体表現活動への取り組みせ方	57
3	実践	57
(1)	学級の歌づくりを通して	57
(2)	レクリエーション集会を通して	57
(3)	「さすが〇〇さん！」タイム	57
4	指導の実際	58
VI	評価と考察	59
1	研究テーマを具現化するための評価場面と評価内容	59
2	活動の評価	59
VII	研究の成果と今後の課題	60
1	成果	60
2	今後の課題	60

＜小学校 特別活動＞

楽しくうるおいのある学級をめざして

— 歌声、身体表現で深める人間関係づくりを通して —

糸満市立真壁小学校教諭 仲 村 克 美

I テーマ設定の理由

学級は児童が一日の大半を過ごす学習の場、生活の場である。学級の中で児童と児童、児童と教師がふれ合い、お互いの良さを認め励まし合うなどの人間的ふれ合いを基盤として、学級内の様々な問題や学習に立ち向かっていく。そういう力を推進していくのが学級活動である。

学級活動は「その本質において、人間的ふれ合いが基盤であり、他者との関わり合いによって成り立つ教育活動である。」と言われている。学級活動の活性化を図ることは、一人一人の個性と持てる力を十二分に発揮させ、意欲的に物事に取り組む力を伸ばしていくことにつながっていく。そのことがひいては学習指導要領のめざす児童像「自ら学ぶ意欲と内発的な学習意欲を喚起し、思考力、判断力、表現力などの資質や能力の育成を図る」前提となってくる。

これまで学級づくりをする時に、根底に音楽活動を位置づけてきた。歌や簡単なダンスは人と人の心を開き、人間関係を深めるのに有効と考えたからであり、時や場所を選ばず理屈なしに誰でも参加できるものだからである。そうすることにより、うるおいのある学級がつくられ、誰もが自由に伸びやかに自己を表現できるようになるのである。しかしながら、高学年にそれを取り入れようとした時、必ずしもそのような学級経営がスムーズにいったとは言い難い。学級の実態として次のことが上げられる。

- (1) 小学校高学年においては自己を意識する年齢ということもあって、ややもすると他人の目を気にしのびのびと表現できない。
 - (2) 教師の指示したものに対しては素直に取り組むが、係活動や諸活動に対する自主的な活動意欲が十分育っていない。
 - (3) 特定の子を仲間はずれにする事があり、一人一人の仲間意識が十分培われていない面が見られる。
- また、児童の実態が浮かび上がってくる中で、めざしていた歌声活動を柱にした学級経営がうまくいっていない原因には次のようなことが考えられた。
- (1) 学級活動の中で、お互いの良さをぶつけ合い、認め合う場や時間が十分ではなかった。
 - (2) 朝の会、帰りの会の歌声活動の取り組みが、教師主導型で児童を主人公とした運営になっていなかった。

そんな中で学級での歌声定着率を見るために、アンケートを実施した。その結果、歌うことが好きと答えた児童は56%、どちらでもないが40%、きらいが4%であった。きらいと答えた児童の理由は高い声が出しにくいということだった。どちらでもないと答えた児童の理由は、みんなが声を出さないで自分も思いっきり歌えないということだった。

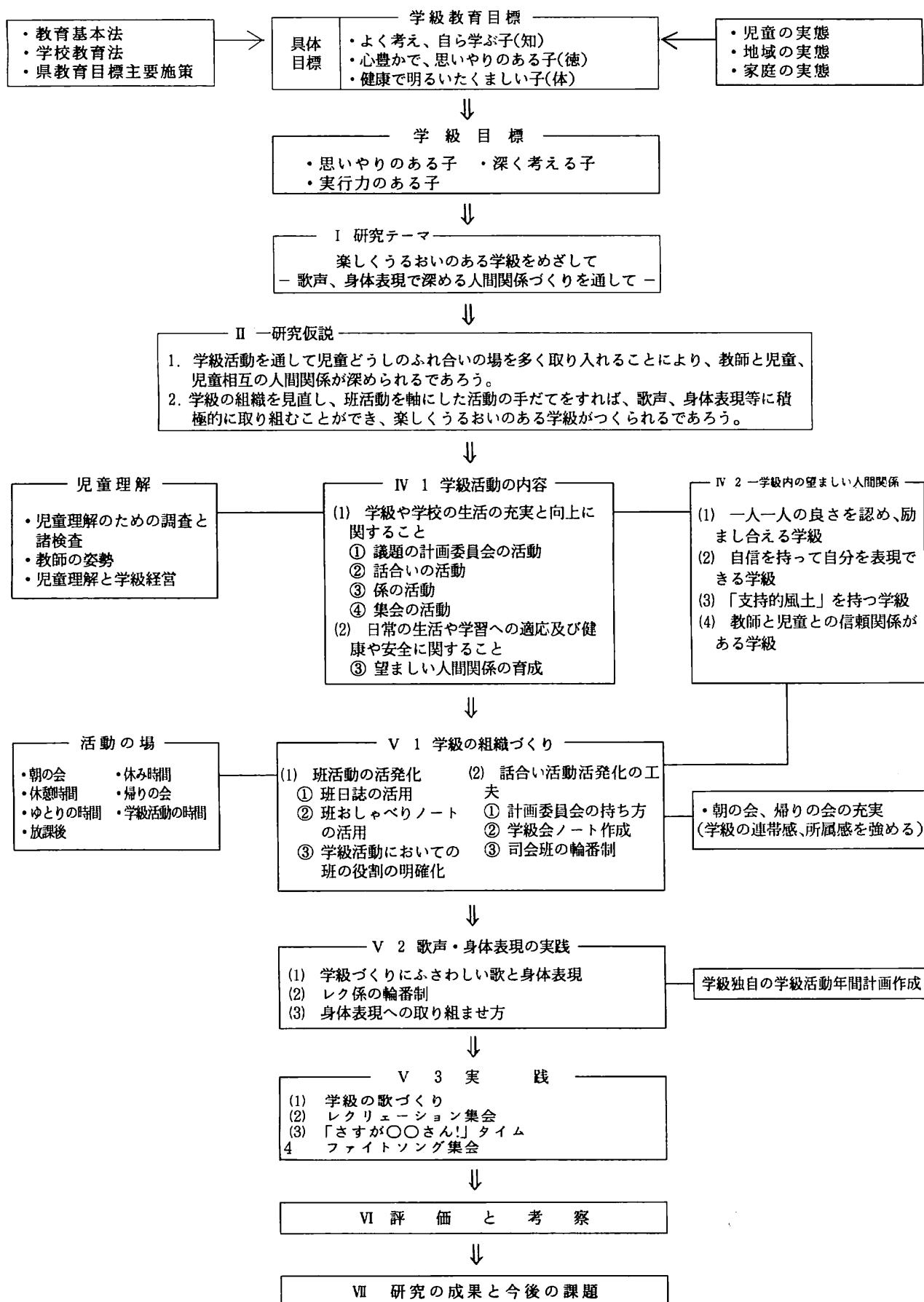
以上のことから学級の組織を見直し、班活動を軸にした活動の手だてを行い、歌声、身体表現に積極的に取り組ませることによってお互いの人間関係が深まり、楽しくうるおいのある学級ができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 学級活動を通して児童どうしのふれ合いの場を多く取り入れることにより、教師と児童、児童相互の人間関係が深められるであろう。
- 2 学級の組織を見直し、班活動を軸にした活動の手だてをすれば、歌声、身体表現に積極的に取り組むことができ、楽しくうるおいのある学級がえられるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図

研究を進めるにあたっては研究内容を整理し、全体を把握するために構想図に表してみた。



IV 研究内容

1 学級活動の特質と内容

(1) 学級活動の特質

『文部省学習指導要領』に示されている特別活動の目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」とある。学級活動はその目標を受け「子ども一人一人が学級の一員として何らかの役割を受け持ち、学級生活の充実と向上をめざして活動すると共に、集団の中で自己を生かし、日常生活を営むために必要な行動の仕方を身につけるなど、健全な生活態度の育成に関わる活動」である。

このように学級活動とは、児童自らが自分たちの学級の諸問題について話し合ったり、よりよい学級生活を送るための諸活動に取り組む活動である。よって教師主導型の教科活動とは異なり、児童の自主的、実践的活動が中心となってくる。また、活動していく中で児童と児童、児童と教師が人間的にふれ合い、協力し合うことでお互いの人間関係を深めていくことができる。

新学力観では「自ら学ぶ意欲」と「個性を生かす」教育が叫ばれている。主体的に学級の諸問題に取り組む態度と、お互いの良さを積極的に認め合い伸ばし合う態度を育成していく上で、学級活動は極めて重要な役割を担っている。

(2) 学級活動の内容

学級活動の内容はP.52の全体構想図参照。

2 学級内の望ましい人間関係とは

(1) 学級内の望ましい人間関係の条件

人間関係とは「相互の人的接触や対人関係とそれを含めた集団関係」である。従って人は様々な集団の中で相互に影響を及ぼし合って存在しているため、集団の中での人間関係は、活動を進める上で大きな影響を与える。人間関係には親子関係、友人関係、労使関係、隣人関係などいろいろあり、学級における人間関係は、児童どうしの人間関係と教師と児童との人間関係に分けられる。両者の関係は教育的人間関係であり、児童が学ぶ活動に対し教師は教えるという意味を持っている。児童がまた明日も学校へ行きたい、先生や友達と勉強するのが楽しいと思える時、その学級の人間関係はうまくいっており精神的にも満ち足りた状態だと言える。

学級内の望ましい人間関係を築いていくための条件として次のことが上げられる。

- ① 児童が教師を信頼し、教師も一人一人の児童の個性を認め伸ばそうとしている。
- ② 児童一人一人が自分の良さを知り、自分に自信を持っている。
- ③ いつでも安心して自分の思っていることや意見が言え、自己を表現できる。
- ④ 一人の問題をみんなの問題とし捉え、お互いに支え合っている。

このようにあるがままの自分を出し合い、お互いを認め励まし合える人間関係ができた時、本テーマである楽しくうるおいのある学級がつけられてくる。

(2) 本学級の人間関係の分析 — 各種検査結果より —

教研式 田中ソシオメトリックテスト、教研式POEM 生徒理解カード2つの検査を11月に行い、学級内の人間関係を探ってみた。

① ソシオメトリックテストより

集団構造を見てみると同性間の選択が多く、思春期にさしかかり異性間で分離する傾向が見られる。また女子11名中9名が第1下位集団に入っており、女子どうしはほぼ一つの集団にまとまっている状態と言える。しかし、女子全員から排斥されているS・Tがおり、周辺児（被選択はあるが相互選択がない）M・Oがいる。

男子の半分が第2下位集団に属しており、ほとんどが野球部に所属し結束力が強い。スポーツでも学級をリードしている。またこの集団はISSS（社会測定的地位指数）も高くなっている。

第3下位集団は男子の2つ目の集団で、野球部以外の児童である。性格的にもおとなしくISSSも第2下位集団の児童より低くなっている。なお、男子と女子に1名ずつ孤立児（誰からも選択されない）がいる。また第1下位集団には3名、第2下位集団には4名、第3下位集団には1名のST（人気児）がおり、この児童らをリーダーとして育成していくことで活発な学級を築いていきたい。

② 教研式POEM 生徒理解カードより

ソシオメトリックテストの結果よりISSS(社会測定的地位指数)がマイナス0.3以下の児童が1名、ISSSがマイナスになっている児童が4名おり、これらの児童は学級集団から疎外されがちであることがわかってきた。それではその原因はどこにあるのか。この5名の主な特質をPOEMの結果よりまとめてみた。(表1)

表1 POEMの結果より

	1 受 容 感	2 効 力 感	3 セ ル フ コントロール	4 不安化傾向	5 対人積極性	6 向社会的性	7 攻 撃 性	主 な 特 質 (P O E M 結 果)
H・O	★	○	○	○	★	★	○	・ 友好的で親和感が強い。 ・ 素直に他人の考えを受け入れられないところがある。
T・K	▼	▼	★	▼	○	○	○	・ 思いやりがあり親切。 ・ 7つの特性が散在する「不確定型」。 ・ 無力感が強い。
S・T	○	○	○	▼	▼	○	▼	・ 適度な受容感、効力感を持っている。 ・ 気に入らないと感情的になりやすい。 ・ 気が弱く自分の考えを主張できない。
M・O	▼	▼	▼	○	▼	▼	○	・ 穏やかで協調性に富む。 ・ 自己効力感や有能感が低く、自立心の形成が遅れている。
A・S	▼	○	▼	▼	★	○	▼	・ 思いやり、やる気共に持っている。 ・ 常に失敗を恐れ緊張している。 ・ 衝動的な面を持っている。

○→適応 ★→過剰適応 ▼→不適応

<分析と考察>

5人中3人が周囲からの疎外感を感じているという結果が出た。T・KやM・OやA・Sなどは思いやりがあり性格的に良いものを持っているにも関わらず、自分に対して自信が持てないため集団の中に入っていけない現状がある。これらの児童には学級活動の中で積極的に役割を持たせ、自分の良さを見つけさせたい。また、H・Oについては性格的には協調性もありあまり問題はないが、不登校になりがちである。集会活動では他の児童にも増して明るく生き生きと活動していた。みんなと関わる経験を多く持たせることで自分の良さを発揮させたい。S・Tは検査結果では気が弱く自己主張が苦手だと出ているが、実際の学級での行動は周囲の者に対してわがままにふるまい、その結果女子のほとんどから排斥されている。集団の中で素直な自分を表現できるよう教師の指導と励ましが必要である。また周りの児童に対してもS・Tの良さを見つけさせるような努力をさせたい。

V 実践活動

1 学級の組織づくりと話し合い活動の工夫

(1) 学級の組織図

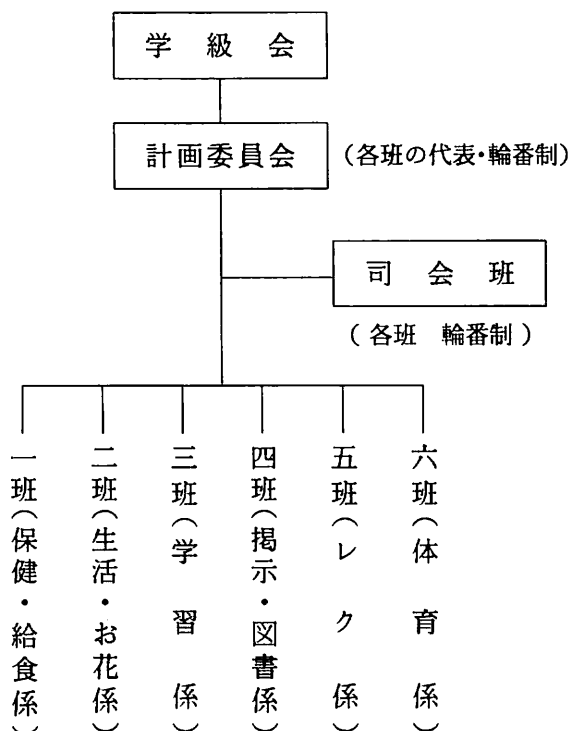


図1 学級の組織図

特別活動はすべて話し合いから始まり、話し合いで終わると言っても過言ではない。活動の中で随時計画→立案→実践→反省をくり返す中から児童の自主的・自治的態度が育成されていく。

班編成に当たっては次のことに留意した。

① 生活班と係班の同一化

学級での活動の班を多く持つと活動の深まりは期待できない。生活班も係班もすべて同一の班を軸にして活動させた。そうすることによって連帯感・所属感も深まってくるだろう。

② 班編成の条件

班長、副班長は男子、女子それぞれ1名ずつ決める。選出は児童に任せる。班長、副班長は班のまとめ役、書記の仕事などを行い、仕事の比重は偏りなく同じくらいにする。

③ 班編成の時期

班の活動期間が短いとどうしても深まりのある活動は生まれない。班編成は学期に1回とし計画→実施→評価→反省をくり返す中で班員どうしの仲間意識も強くなってくる。

④ 班編成の手だて

班長選出は立候補制を第一とし、進んで班のために働くという意識を持たせるようにする。学級の中で疎外されがちな児童に対しては、班員の一人に世話や言葉かけなどを頼っておき常に行動を見守り励ますようにする。

(2) 話し合い活動までの流れ

学級会（話し合い活動）までの活動の柱を右のようにした。（図2）

- ・議題は班日誌、学級日誌、アンケート、学校行事などから発見する。
- ・計画委員会では話し合いがスムーズにいくように話し合いの柱、めあてなどを立てておく。
- ・司会班は一年に一度は経験するように班で輪番制にする。
- ・ノート記録はよく意見を発表していた人、よく考え深まりのある意見を出していた人を観察しておき記録発表の時に発表する。

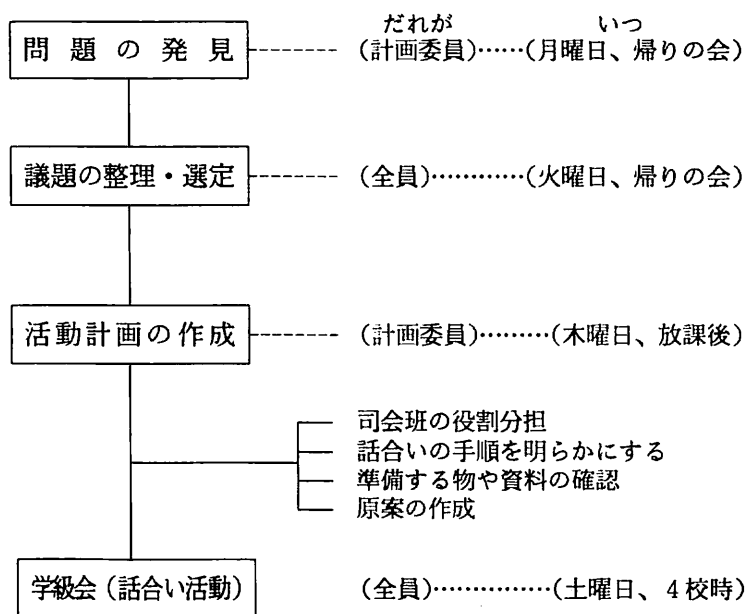


図2 学級会（話し合い活動）まで

2 歌声活動、身体表現活動への取り組みせ方

(1) 学級の雰囲気づくりにふさわしい歌と身体表現

人は誰でも自分の声という楽器を持っている。少々歌がうまい、下手ということはあっても誰でも声を出すことができる。学級の児童どうしが照れることなく声をそろえて歌える時、一人一人の心が解放され、人間関係も深まってくる。

では、学級の雰囲気づくりをするための歌を選ぶ場合、こういった条件が必要だろうか。

- ① いつでも、どこでも、だれにでも簡単に歌える歌であること。
- ② 覚えやすいメロディーで、あまり長くない歌であること。
- ③ リズムのはっきりした、音域が幅広くない歌であること。

身体表現というと、ダンスや歌遊び、即興表現なども含める。一般に行われるダンスや歌遊びの条件としては、次のような条件が上げられる。

- ① 動きが単純で覚えやすいもの。
- ② 身体のふれ合いがあるもの。(握手や肩たたきなど)
- ③ 明るい曲でリズムのはっきりしているもの。

こういった条件のもと、年間計画を作成した。(表2)

表2 歌と身体表現の年間計画

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
歌	・一つの手 ・キャンプの夜	・すいかの名産地 ・ドレミの歌	・あの青い空のように ・飛べバガサス	・切手のないおくりもの ・アルプス一万尺	夏 休 み	・運動会の歌 ・友達讃歌
ゲーム その他	・自己紹介ゲーム ・じゃんけん手たたき	・おんぶゲーム ・ドレミの歌ふりつけ大会	・弁慶(歌遊び) ・トレロカモミロ(ダンス)	・茶つき(歌遊び) ・アルプス一万尺(ダンス)		・運動会での全校ダンス ・友達讃歌(ダンス)
月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
歌	・友達だから ・ビューティフルサンデー	・ちびっこカウボーイ	・ジングルベル ・サンタが町にやってくる	・北風小僧の寒太郎	・心に咲くたんぽぽ	・卒業式の歌 ・ありがとう さようなら
ゲーム その他	・ビューティフルサンデー(ダンス)	・ももたろう(歌遊び) ・ちびっこカウボーイ(ダンス)	・お正月のおもちつき(歌遊び) ・ジングルベルふりつけ大会	・人間バスケッ ・ヘイヘイ ニセタ(ダンス)	・まわれまわれ(ダンス) ・帰ってきたウルトラマン(ダンス)	・らかんさん(歌遊び) ・マイ ボニー(歌遊び)

(2) レク系の輪番制

歌声活動を児童はどう捉えているのかを書かせてみた。歌がしっかり歌えた時の気持ちとして、歌はみんなを元気づけたり明るくしてくれる、学級の雰囲気をつくってくれる、気持ちがすっきりするなど捉えていた。この結果から、どの児童も歌声が学級の雰囲気を良くするに有効だと考えている。では歌声活動をどのように学級づくりに取り入れていけばよいのだろうか。一学期はレク係が一つの班に固定されていたので、児童の一人一人に自分たちの学級づくりのための歌声活動だという意識が育っていなかった。一人一人が主人公になって歌声活動やレク活動に取り組んだ時に初めて全員の活動となり、意欲が伸びてくる。このようなことからレク係を固定化せず、2週間の活動期間を置き班で輪番制とした。朝と帰りの会の10分間のうち5分間を活動時間とし、健康観察や諸連絡は随時行うこととした。次の表は一週間の計画である。(表3)

表3 レク活動一週間の計画表

	月	火	水	木	金	土
朝の会	学級歌班のめあて	全校朝会	今月の歌	係からの連絡	歌遊び	
帰りの会	がんばるコール	ゲーム(ダンス)	連絡のみ	「さすが〇〇さん」タイム	ゆんたくタイム(月2回)	がんばるコール

(3) 身体表現活動への取り組みせ方

二学期から三学期にかけて班対抗のふりつけ大会を行った。二学期はファイトソング集会において発表し、三学期は学級活動の時間に発表会を持った。帰りの会で計画を立てさせ、ほぼ一週間の練習期間を置き実施した。これらの活動で表現に対して消極的だった男子が、女子に助けられ恥ずかしがらずに表現するようになった。(表2参照)

3 実践

(1) 学級の歌づくりを通して

学級の歌声活動の意欲を高めるためには、学級活動の際に誇りを持って全員で歌える歌、学級歌を作成する必要性を感じた。そこで少々時期としては遅いが学級歌づくりに取り組んだ。話し合い活動をもとに各班で歌詞を考えた。曲はテレビ キテレツ大百科の主題曲「お料理大行進」とし、かえ歌にすることにした。学級歌の題は「5の1大行進」と決まった。歌詞づくりは各班の良いところを計画委員会で選び、それを合わせて一つの歌詞にまとめた。その後、集会活動や話し合い活動の時にはいつも歌うようにしたところ、一人一人が自信を持って歌えるようになり歌声の意欲につながった。(資料1)

(2) レクリエーション集会を通して

話し合い活動、各班での準備・練習を経て11月24日(金)にレクリエーション集会を行った。集会の成功に向けて各班でそれぞれの仕事を成し遂げたことで児童は満足感を持てたようであった。ゲームやダンスも男女がうちとけて楽しそうであった。ダンスを担当した児童が学級の児童全員に前もってダンスを教えていたので、本番では時間を取らずにスムーズに進められた。これは教師が予想しなかった児童の良さの発見であった。また、準備の分担や出し物の練習などをやり通したことで班への所属感、連帯感が芽生えてきた。

(3) 「さすが○○さん！」タイム

学級の仲間一人一人に目を向けその人のがんばったこと、良いところをみんなで見つける「さすが○○さん！」タイムを木曜日の帰りの会でクイズ方式にして行った。一週間に一度、班員の一人を対象にして友達の良いところを3つ見つけてカードに記入する。本人は好きな友達の良いところを書く。初めは班員を中心にしてそれからクラス全員へと広げていく。このカードを帰りの会で司会が読み上げ、この人は誰かを当てる。最後にみんなで拍手をして友達の良いところを認めてあげる。(資料2)



▲ (資料1)



(資料2)▶

4 指導の実際

(1) 主題名「ファイトソング集会をしよう」

(2) 指導観

学級活動の指導においては児童の発想や創意を十分尊重し、実践的な態度を焦らずに育成する構えを持つことが大切だと言われている。これまで行ってきた話し合い活動、集会活動の経験や反省をもとにして、より高い話し合い活動の技能を習得させたい。そして、より楽しい集会活動を工夫することの経験を通して、学級での自己の役割や友達の良さなどに気付かせたい。これらの活動を通して学級に所属することの喜びや充実感を味わうことができる。

(3) 本時の展開

過程	活動の内容	時形	指導・援助の留意点	準備・資料
共有化	1 はじめのことば ・活動のテーマ発表	5'	・テーマを設定した理由を簡単に述べ、これまでの活動の流れをつかませる。	・テーマを書いた紙
	2 学級の歌「5の1大行進!」 ＜レク係＞	斉	・自分たちで作った歌だという誇りを持って生き生きと歌う。	・テープ ・歌詞表
	3 集会のめあて発表 ＜進行係＞		・めあてを意識し、楽しい集会にしようという意欲を持たせる。	・めあてを書いた紙
活動の展開	4 審査方法発表 審査員紹介 ＜審査係＞	5'	・審査項目を全員にはっきりわからせる。	・項目を書いた紙 ・審査用紙 ・歌テープ ・グループで使う物
	5 ジョニーズジュニアグループ発表	5' グル	・機敏な行動、はきはきとした発表を心がけさせる。	
	6 ラッキーソンググループ発表	5' プ	・発表の前にグループのめあてを述べさせる。	
	7 V Hグループ発表	5'	・流れがスムーズにいくように司会の進め方をきびきびとさせる。	
実践の意欲化	8 良かったところ発表	7'	・代表の児童からはきはきと発表させる。	・賞状、メダル、テープ
	9 表彰式 ＜表彰係＞	5'	・聞く人は大きな拍手を送る。	
	10 今日の集会の感想	5'	・楽しい雰囲気で行うようにさせる。	
	11 先生のお話	2' 斉	・どの子も進んで発表しようという意欲を持たせる。	
	12 終わりのことば	1'	・これまでの一人一人の努力を讃え、みんなで力を合わせ真剣に取り組む事の意義を知らせる。 ・元気いっぱい終わりのあいさつをさせる。	

(4) 考察

短い準備期間であったが、児童は自分たちの分担された仕事に真剣に取り組み、児童の思いが表れた集会ができた。また、ふだん学級から排斥されがちな児童が司会や指揮などで活躍できたことは大変よかった。リーダー的な児童が陰で集会をしっかりと支えてくれた。課題としては、発表のマナーにとらわれ過ぎてのびのびとした表現に欠けたので、次回は児童が思いっきり表現できるよう指導していきたい。また、練習時間も十分とらせるように配慮したい。

などは活動の計画、実施の段階で特に活躍し、以前より自分に対して自信を持つようになった。A・Sは排斥が4から0になり特に良い変化が見られる児童である。学級活動でがんばっている姿を他の児童が発見し、「A・Sさんはいろいろな事を知っている物知りな人だなあと思った。」とか「A・Sさんと一緒に活動していく内に気が合うようになった。」などの感想が見られた。「男子と前より話すようになった。」という感想からは男女が協力して活動した良さが伺えた。また、「もっと学級会などで司会をやってみたい。学級委員にもなってみたい。」などと以前はおとなしかった児童が学級へもっと貢献したいという気持ちを持つようになってきた。第1回のソシオメトリックテストに比べると排斥が減ったこともお互いの人間関係が良くなってきた表れである。

表5 ソシオメトリックテストの結果比較（11月と2月の個人比較）

児童	実施日	C (被選択数)	R (被排斥数)	CRS (C-R)	mc (相互選択)	mr (相互排斥)	ISSS (社会測定的地位指数)
H・O	11月実施	0	6	-6	0	0	-0.13
	2月実施	1	4	-3	1	1	-0.065
T・K	11月実施	2	8	-6	1	2	-0.23
	2月実施	1	3	-2	0	0	-0.0435
S・T	11月実施	0	15	-15	0	1	-0.43
	2月実施	0	11	-11	0	0	-0.239
M・O	11月実施	1	2	-1	0	0	-0.02
	2月実施	0	1	-1	0	0	-0.221
A・S	11月実施	2	4	-2	1	2	-0.14
	2月実施	3	0	3	2	0	0.265

Ⅶ 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 学級経営において学級活動を活発化させることは、児童の自主性を伸ばし個性を伸長していく上で極めて重要であることが分かった。
- (2) 学級の組織を見直し、話し合い活動を基盤にした集会活動を体験させたことによって、児童が自主的に学級づくりに取り組むようになった。
- (3) 話し合い活動や集会に向けての仕事をしていく中で学級の信頼関係が深まり、集団活動から排除される傾向にあった児童が班活動や学習面に意欲的に参加するようになった。
- (4) ソシオメトリックテストやP O E Mの検査をしたことで、学級の人間関係や児童の個性を把握することができ、諸活動に活かすことができた。
- (5) 学級集団に対する所属感、連帯感が培われ、相互信頼と相互尊重の精神が確立されてきた。

2 今後の課題

- (1) 学級の人間関係は二学期より良くなりつつあるが、孤立児がまだ2名いる。道徳との関連を図り、お互いを認め合う態度を伸ばす中から、孤立児をなくす指導をしていきたい。
- (2) 孤立児には周囲の問題もあるが、本人の問題も少なくない。問題傾向の児童には教育相談を行い、自分を見つめ直させる指導をしていきたい。
- (3) 表現力は伸びてきたがこれから最高学年を迎えることで、表現することに照れが出てくる。今後も活動を継続していく中からより質の高い表現活動をめざし、よりよい人間関係づくりに努めたい。

<主な参考文献>

坂本光男著	『学級集団づくりの原則』	明治図書	1988年
加藤辰雄著	『学級づくり入門』	あゆみ出版	1988年
明治図書出版株式会社	『特別活動研究』 (5月号、6月号、7月号、10月号)	明治図書	1955年
岸田元美著	『教師と子どもの人間関係』	教育開発研究所	1987年